

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

## ■第5章「命」

3月15午前、福島第1原発所長の吉田昌郎(56)は免重要棟に残った面々は、状況が「悪いなりに安定してきている」と感じ始めていた。

2号機原子炉に海水が注入できている。構内の放射線量も下がってきていた。「状況そんなに悪化していない」

吉田が第2発電班長の国頭晋(48)に話し掛けた。

「ア！夕ほそれほ悪くなっている」

「そうなんだよな。安定しているんだよ」

退避を命じた早朝の時点で吉田は、2号機の圧力抑制室に大穴が開

## 退避者を呼び戻せ

12



東京電力福島第1原発から約50人の退避先となった福島第2原発の体育館。2011年5月(順天堂大・谷川武教授提供)

# やれることがある

は避けられない。状況を聞きながら事態悪化を防ぎ

「人がたくさんいないと回しきれないですね」

免震棟に残った者たちは、一度は呼び出された。第1原発に残った同

僚からだった。

「こっちはなんとか大丈夫そうです。帰ってきてもらえませんか」

まだやれることがある。

「分かりました」。即答だった。

機員は同じ電気設備担当者だけに、

「いいかばんにしてくださいよ」

「いったん家に帰らせてください」

担当の中には健康の爆発に巻き込まれた者もあり、当然の反応だった。

だが一方で「よし。もう少し頑張る

か」と手を挙げる者も、6人いた。

15日前、復旧班や発電班、保安

班の班員たちが徐々に第1原発に戻

り始めた。(敬称略。年齢、肩書は

省略)

「必要ならつを何人が呼び戻せ！」

「おい、だな」

部下たちの考えに同意して吉田が

2人の話の輪に、4号機の火災を

発見して戻ってきた第1復旧班長緒

垣武之竹(47)も加わった。

「線量は高いですけど、現場の作業ができないというほじやありま

せん」

「だげこの線量じゃすぐに人線

きた社員たちが疲れ果て横になっ

ていれば、深刻な被ばく者が出るの